

## 順社会行動：「いじめ」への援助に関する心理学的研究

山 本 俊 磨

---

### Prosocial Behavior: A Psychological Study On Help Giving To "IJIME"

---

#### I はじめに

いま学校で「弱いものいじめ」が深刻な問題となっている。新聞やテレビをはじめとして、ジャーナリスティックな意味で、この問題は、すっかりわれわれになじみの問題になってしまった。のみならず、文部省も、「弱いものいじめ」の深刻さを放任できず、小学校教師向けの手引書「児童の友人関係をめぐる指導上の問題」を発売し（1984）、さらに今年6月29日には、例外措置として、「いじめ」が深刻ならば転校も認めるという通知を出すにいたった。

朝日新聞の報道によれば（1985年6月30日朝刊）、文部省の緊急対応措置は次のようなものである。

- ① いじめによる被害が児童生徒の心身の安全を脅かすほど深刻化しているなどの場合くは、学校教育法の施行令を弾力的に運用し、学校の指定替え（転校）が行えるようにする。
- ② いじめを誘発、助長しているなどと批判のある教師の「体罰」については、改めて禁止規定の徹底をはかる。
- ③ 学校内外に相談窓口の整備を進める。

以上を骨子とする文部省初中局長通知が全国の都道府県教委などに送られたのであるが、いじめ問題とからんでの通学区の規制緩和問題は、国会、臨教審の場でも論議されており、また教師の体罰問題では、法務省などが「児童生徒への人権侵害事件として対処する」と強い方針をうち出していた。文部省が通学区の一部規制緩和を行うのは初めて、体罰禁止規定の周知をはかるのは、昭和32年以来28年ぶり、戦後二度ということである。

こうした状況は既に目新しいものではない。ジャーナリズムの世界でも、NHK や民間放送で、何度もとり

あげられており、前者では、「おはよう広場」で放送されたものが、「弱い者いじめ—教室からの報告—」（1984）として発刊され、後者では中京テレビから「〈いじめ〉問題の出入口」（1984）となっている。

さらに、子どもの世界で広がっている「いじめの構造」という観点から、①いじめっ子とそのグループ ②被害者 ③周囲の観衆 ④無関心な傍観者、という四層構造からこうした問題を捉える者もいるが（森田洋司 大阪市大助教授 1984.12.17 朝日新聞朝刊）、文部省通知は、子どもの問題が、学校の教育現場のあり方そのものに影響されていることを認めているのである。

近年のいじめの特質として、「陰温化」「長期化」「集団化」「暴力化」ということがよくいわれるが、同時にこの背景として、われわれの社会や教師を含む大人の責任も問われていることを忘れてはならない。

このように錯綜した「いじめ」現象を見るとき、印象的に思い浮かべるのは、Latané, B. & Darley, J. M. (1970) による「冷淡な傍観者」に関する研究である。

この研究は、周知のように、1964年にニューヨーク市で発生した“Kitty Genovese”事件に触発されたものであった。

この事件では、「38人もが彼女の悲鳴を聞きつけて窓から顔を出したが、彼女を助けに駆けつけた人間は一人もいなかった。加害者が彼女を殺害するまでに30分もあったというのに、誰一人、警察に電話した者さえいなかったのだ。彼女は死んだ」

この事件をめぐるさまざまな、そして非常に大きい反響の中から「個人が集団から孤立すること」「事件を無視してそれから心理的に遠ざかること」あるいは、「冷淡」「無関心」などを事件への手がかりとして拾いあげながらも、Latané らは“何故人は助けられないのか？”という問題を提出した。

彼らは、緊急事態についての種々の実験を通じて、緊急事態の現場に、自分以外の他者が存在することが、事態への介入（援助）の可能性を減少させることを見出した。これがいわゆる傍観者効果である。森田が、「いじめの構造」について、「無関心な傍観者」といったのもこれに通ずる現象であろう。いじめられている他者を見ながら何の援助もしない、いわば責任の分散が見られるのである。

こうした事情は Latané らに限らず、援助行動の諸研究の分野でよく知られている。もっとも、集団の凝集性が高い集団では、むしろ集団構成員が多い方が少数の成員の集団よりも早く援助をするという研究もあり、凝集性や集団の規範の顕現性も問題になる (Rutkowski, G. K. et al 1983)。

ところで、援助行動とは、一般に他者が望む状態を実現させるために、自分の意志で手を借す行動のことである。簡単に、「困っている他者を助ける行動」ということもできる。こうして自発的に他者の利益のために（自己の利益、報償を期待しないで）援助をする行動を順社会的行動 (Prosocial Behavior) と呼ぶ。

この順社会的行動については類型化の試みがいくつかなされているが、高木 (1982) や、それを受けた松本ら (1984) の研究によれば、以下のように順社会的行動がクラスター化されている (表 I-1-1)。

このように、順社会的行動は種々の行動側面をもつ

が、どのような過程を通して、この順社会的行動が表われてくるのかという問題がある。

さきに紹介した Latané らは、緊急事態において、人がその事態にどのように介入するか、介入の過程を次のように述べている

1. 緊急事態への注意
2. 緊急事態発生という判断
3. 個人的責任の度合いの決定
4. 特定の介入様式の決定
5. 介入の実行

さらに Schwartz, S.H. (1977) は、「規範的意志決定過程について、次のように検討している。彼は、まず援助に関する規範を社会的規範と個人的規範とに分けているが、前者は、社会（集団）によって共有されたある行為に対する期待であり、この規範への同調、逸脱には常に社会的なサンクションが伴う。このサンクションを予想することで、援助行動をとらせたり差しひかえさせたりするのである。後者は、社会的相互作用によって習得された、人が自分に抱く期待であり、経験を通じて内在化された価値によって生み出された道徳的な義務感である。これらは個人の相互作用の歴史に応じて異なる。この規範への同調は、自己満足（誇り、自尊心の高揚、安心）を生み出し、逸脱では、自己否定感（罪悪感、自己非難、自尊心の低下）を生じる。

表 I 1-1 順社会的行動の類型化 (高木 1984 による)

行動群	行動内容	具体的内容
1. 寄付・分与行動	お金、持物、努力、時間と寄付・提供する行動	持ち物の分与、難民の受け入れ
2. 奉仕活動	老人・身障者等への身体的努力・時間の提供	老人等への身の回りの世話、耳の不自由な人のために手話の練習する
3. 献血・臓器提供活動	自分の血液など特殊なものの提供	献血、腎臓バンクへの協力
4. 形式的・組織的援助行動	あらかじめ計画された組織形態による行動	調査、募金への協力
5. 努力を必要とする援助行動	身体的努力を必要とする行動	地区の清掃、ひっこしの手伝い
6. 小さな親切行動	他者から依頼されてそれを承諾する程度の行動で非常に簡単なもの	両替え、カメラのシャッターを頼まれておしよける
7. 緊急事態での援助行動	重大な危機に陥った人の援助	溺れている人の救助、警察への通報
8. 援助を必要としている人への援助行動	一人ではできないで困っている人への援助	迷い子の誘導、目の不自由な人の手をひく
9. ちょっとした気配り行動	他者に対して自発的に気を配る行動	狭い道で道をゆずる

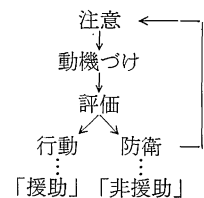


図 I 1 Schwartz の意志決定過程のモデル (1977)

したがって、そのような個人的サンクションを予想することは、援助行為を生起させたり、抑制したりするのである。かくして、Schwartzの意志決定過程は、図I、1-1のようにモデル化される。ただし、Schwartzが、上述のモデルに基いて提出した仮説を、高木(1984)は日本において検証しようとしたが、6つの仮説のうち、厳密な意味で支持されたのは、第1仮説〈愛他行動は、「重要な他者からの知覚された期待」(社会的規範)よりも、「自己期待」(個人的規範)によって一層限定される〉だけであった。

さて、Schwartzに従えば、人は他者の援助を求めようとする要求に気づき、そのために有効な行為を確認し、それを行うための自分の能力を認識する注意の段階をへて、個人的規範意識(それを行う責任が自分にあるか)と、社会的規範意識(社会は自分にそれを行うことを期待しているか)が活性化される動機づけの段階へ、第3に、行為の結果、自分にふりかかる出費(コスト)と報酬を分析する評価の段階。なお、この出費と報酬は、行為しない時にも伴う。そして、この結果、行為の意志決定が下れば、援助行動へと進むが、しかしその決定が困難である場合は、そこに葛藤が生じ、自己を防衛し、活性化された個人的義務感を弱めようとしたり、行為(援助)を示さなければ自分がどんな影響を受けるか考え、再び各段階をくり返して、援助か非援助かの決定が下される。この際、援助出費として、高木(1981)は、行為の困難性、努力、危険性、時間を、非援助出費としては、恥、いやな気分、個人的責任性などをあげている。後者は、個人的規範に基く出費である。

以上の援助の構造的な側面以外に、援助者のパーソナリティ特性についても様々な議論があるが、本稿においては一例を示すとどめる。

Wilson, J.P. と Petruska, R. (1984) は、自尊心の高い人と自己の安全を望む人とのパーソナリティの要因を、緊急事態に介入するモデルの効果(能力、地位、介入程度を変数とする:状況的要因)について実験を行っている。その結果、自尊心の高い人の方が援助をする割合が高く、介入に積極的なモデルの時、多くの援助が生じたことを報告しているが、自尊心の高い人は高能力のモデルの影響を、自己安全を望む人は高地位のモデルの影響を受けるということも見出した。

このように、援助行動については、非常に多くの手がかりがとりあげられるが、本稿では、特に状況的要因に注目して以下の実験を行うことにする。

## 研究の目的

本研究では、援助の場面を学級でのいじめ行動への介入として設定した。

いじめは、いじめそのものの問題として一面的にとらえられるだけでなく、非行、登校拒否など他の教育問題の中で関係づけられ、とらえられている。また、単に教育問題としてだけでなく、今や社会的な問題としてもクローズアップされている。

最近のいじめの傾向として、昔に比べて陰湿になってきている点が強調されているが、一方で、1985年1月21日に起きた中2の女生徒の自殺の原因といわれるいじめのように、その子の家にまでおしかけて圧力を加えるなど、大胆な手段によっていることも少なくない。原因としては、学校、家庭における人間関係など様々なものが考えられようが、本研究はいじめの原因を解明しようとするものではない。いじめと順社会的行動の関係を実験的に解明することを目的とする。また、いじめを子どもたちがどのように捉えているかを知るため、実態調査の側面もとり入れ、ここからいじめにおける援助の構造を理解することも本研究の目的である。

なお、いじめの状況的要因としては、次のようなものである。

〔手 段〕:身体的にダメージを与えるもの(直接的な暴力によるいじめ)か、物質的・精神的にダメージを与えるもの(物をかくす、壊すなど)か。

〔構成人数〕:いじめる側の人数の多少(5人対1人)。

〔傍観者数〕:いじめを見ている人は自分1人(傍観者なし)か、クラス全員(傍観者あり)か。

## II 方 法

### 1. 被験者

松江市立内の小学校児童、5年生5学級192名(男子107名、女子85名)

実験施行日は、昭和59年10~12月(予備調査を含む)

### 2. 実験デザイン

序章で述べた、いじめにおける状況的な要因に性差を加えた $2 \times 2 \times 2 \times 2$ のデザインを設定した。つまり、いじめの手段のちが(身体的:物質的)。いじめる側の構成人数のちが(5人:1人)。いじめの様子を見ている状況のちが(傍観者あり=クラス全員で見ている:傍観者なし=自分一人で見ている)。性差(男:女)。以上のデザインのそれぞれの細胞には、16人ずつ同数の

被験者がわりあてられた。なお、手段については、すべての被験者が両方の手段を経験するように配置した。

また、実態調査も同じ被験者であるが、男女それぞれ80人ずつ、計160人をサンプルとした。

### 3. 実験手続

被験者に提示されるいじめについての文章は、次のようなものである。

#### ○身体的手段、傍観者あり条件

今は、雨の日の昼休みの時間です。みんな、教室で楽しそうに遊んでいます。でも、教室のうしろの方で、5人の子がAという子をほうきでつついたり、かみの毛をひっぱったり、けったりしておもしろがっています。Aという子は、何も悪いことをしていませんが、おとなしいし、クラスの中でもあまり目立たない子なので、何をされてもだまったままうつむいています。みんなもこの様子に気付いています。

#### ○身体的手段、傍観者なし条件

今は、昼休みの時間です。みんな、外で遊んでいるので教室にはだれもいません。あなたが一人で教室にもどってみると、教室のうしろの方で、5人の子がAという子をほうきでつついたり、かみの毛をひっぱったり、けったりしておもしろがっています。Aという子は、何も悪いことをしていませんが、おとなしいし、クラスの中でもあまり目立たない子なので、だまったままうつむいています。今、この様子を見ているのはあなた一人です。

#### ○物質的手段、傍観者あり条件

今は、雨の日の昼休みです。みんな、教室で楽しそうに遊んでいます。でも、5人の子がBという子の大切にしている下じきをわったり、ノートやランドセルにチョークで落書きをしておもしろがっています。Bという子は何も悪いことをしていませんが、おとなしいし、クラスの中でもあまり目立たないので、何をされてもだまったままうつむいています。みんなもこの様子に気付いています。

#### ○物質的手段、傍観者なし条件

今は、昼休みの時間です。みんな、外で遊んでいるので教室にはだれもいません。あなたが一人で教室にもどってみると、5人の子がBという子の大切にしている下じきをわったり、ノートやランドセルにチョークで落書きをしておもしろがっています。Bという子は何も悪いことをしていませんが、おとなしいし、クラスでもあまり目立たないので、何をされてもだまっ

たままうつむいています。今、この様子を見ているのは、あなただけです。

なお、いじめる側の構成人数については、ここにあげた条件ではすべて「5人の子」になっているが、もう一つの条件では、下線部が「1人の子」である。

以上のような文章に関して、被験者は、いじめの様子について、いじめられている子についてどう思うかを、それぞれ、ひどさ、かわいそうさの程度として、5ポイント尺度で測定された。

また、いじめへの介入（援助）を、次の3点から選択させた。

「直接自分一人で助ける」「別の方法で助ける」「特別何もしない」さらに、「別の方法で助ける」とした者には、「先生に話す」「友だちに話す」のうちいずれか一方を選択させた。

教示としては、いじめられている子を同性として質問紙を読むように注意した。

### 4. 実態調査項目

- いじめの知覚：いじめられている子どもやいじめそのものをどのように知覚するか（5ポイント）
- いじめに対する援助：いじめを知覚したときどのようにふるまうか。この行動は、「行動意図」であって実行動ではない。
- 出費（コスト）：非援助出費（個人的規範に基づく）として、個人的責任性、いやな気分を測定する。援助出費としては、危険性、時間、努力の3つを測定する。
- 経験：いじめられている子を援助した経験の有無である。
- 自己概念：勉強、運動について、その自信の程度。友人関係としての社会性、適応性を測定して、パーソナリティ要因を検討する材料とした。

## Ⅲ 結 果

### 1. 実験結果について

〔いじめ及び、いじめられている子に対する知覚〕

いじめ、いじめられている子についての知覚の測定値を得点化し、とてもひどい（かわいそうだ）と思うを5点、まったくひどい（かわいそうだ）とは思わないを1点とし、それを用いて、いじめの各手段における性差、

構成人数のちがい、傍観者の有無の3要素についての分散分析を行なった。

まず、いじめに対しての知覚についてであるが、身体的手段物質的手段の両方において性差が見られた。[F(1, 120)=13.32 P<.001, F(1, 120)=5.47 P<.05] また、物質的手段においては、構成人数に主効果が見られ [F(1, 120)=7.03 P<.01] 傍観者と構成人数 [F(1, 120)=7.09 P<.01]、および3要素の間に [F(1, 120)=4.09 P<.05] 交互作用が認められた他は、主効果、交互作用ともみられなかった。(表Ⅲ. 1-2a, b) 性差においては、女子の方が、構成人数については、

**表Ⅲ 1-1**  
各条件におけるいじめ及びいじめられている子に対する知覚

要 因				い じ め		い じ め ら れ て い る 子	
手段	構成人数	傍観者	性	平均	SD	平均	SD
身体的	5人	あり	男女	4.44	0.63	4.69	0.48
			男女	4.69	0.48	4.44	0.81
		なし	男女	4.50	0.63	4.25	1.06
	1人	あり	男女	4.81	0.40	4.81	0.40
			男女	4.34	0.89	4.44	0.73
		なし	男女	4.94	0.25	4.94	0.25
物質的	5人	あり	男女	4.63	0.62	4.56	0.89
			男女	4.94	0.25	4.63	1.02
		なし	男女	4.25	0.68	4.19	1.11
	1人	あり	男女	4.56	0.51	4.56	0.51
			男女	4.69	0.60	4.63	0.62
		なし	男女	4.63	0.81	4.75	0.45
1人	あり	男女	4.88	0.34	4.63	0.89	
		男女	5.00	0.00	4.88	0.34	
	なし	男女	4.38	0.81	4.38	0.81	
				4.94	0.25	4.69	1.01

**表Ⅲ 1-2a**  
いじめに対する知覚の程度の得点による性差、傍観者の有無、構成人数差についての分散分析表

身 体 的 手 段				
変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	4.13	1	4.13	13.32***
B 傍 観 者	0.38	1	0.38	1.26
C 構 成 人 数	0.38	1	0.38	1.26
AB 交 互 作 用	0.07	1	0.07	0.23
AC	0.20	1	0.20	0.65
BC	0.01	1	0.01	0.03
ABC	0.19	1	0.19	0.63
誤 差	37.19	120	0.31	
計	42.55	127		

5人によるいじめをよりひどいものとして知覚したようである。

いじめられている子の知覚については、両手段におい

**表Ⅲ 1-2b**  
物 質 的 手 段

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	1.75	1	1.75	5.47*
B 傍 観 者	0	1	0	<1
C 構 成 人 数	2.25	1	2.25	7.03**
AB 交 互 作 用	0.02	1	0.02	<1
AC	0.39	1	0.39	1.22
BC	2.27	1	2.27	7.09**
ABC	1.31	1	1.31	4.09*
誤 差	38.56	120	0.32	
計	46.55	127		

**表Ⅲ 1-3a**  
いじめられている子に対する知覚の程度の得点による、性差、傍観者の有無、構成人数差についての分散分析表

身 体 的 手 段				
変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	1.53	1	1.53	4.64*
B 傍 観 者	0.12	1	0.12	<1
C 構 成 人 数	0.28	1	0.28	<1
AB 交 互 作 用	0.28	1	0.28	<1
AC	0.12	1	0.12	<1
BC	0.03	1	0.03	<1
ABC	3.14	1	3.14	9.52**
誤 差	39.37	120	0.33	
計	44.87	127		

**表Ⅲ 1-3b**  
物 質 的 手 段

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	2.29	1	2.29	3.95*
B 傍 観 者	0.07	1	0.07	<1
C 構 成 人 数	0.38	1	0.38	<1
AB 交 互 作 用	0.07	1	0.07	<1
AC	0.01	1	0.01	<1
BC	2.26	1	2.26	3.90
ABC	0.20	1	0.20	<1
誤 差	69.81	120	0.58	
計	75.05	127		

表Ⅲ 1-4

いじめに対する知覚の程度の得点による性差、手段差、構成人数差についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	5.64	1	5.64	17.63**
B 傍 観	0	1	<1	<1
C 構成人数	2.52	1	2.52	7.88**
AB 交互作用	0.25	1	0.25	<1
AC	0.29	1	0.29	<1
BC	0.12	1	0.12	<1
ABC	0.29	1	0.29	<1
誤 差	80	248	0.32	
計	89.11	255		

表Ⅲ 1-5

いじめられている子に対する知覚の程度の得点による性差、手段差、構成人数差についての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	3.75	1	3.75	6.36
B 傍 観	0	1	0	<1
C 構成人数	0.66	1	0.66	1.12
AB 交互作用	0.04	1	0.04	<1
AC	0.10	1	0.10	<1
BC	0	1	0	<1
ABC	0.04	1	0.04	<1
誤 差	145.34	248	0.59	
計	149.93	255		

て、性差が有意であった。[ $F(1, 120)=4.64$   $P<.05$ ,  $F(1, 120)=395$   $P<.05$ ] その他、身体的手段において3要因間に交互作用が見られた。[ $F(1, 120)=952$   $P<.01$ ] ここでも、女子の方が、かわいそうだと知覚する程度は高かった。

以上の結果において、傍観者の有無についての主効果は見られなかったので、この要因を一まとめにし、主効果の見られた、性差、構成人数差に手段のちがいを加えて、 $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を行なった。その結果、これまでと同様に両者に有意な性差が見られた [ $F(1, 120)=17.63$   $P<.01$ ,  $F(1, 120)=6.36$   $P<.05$ ]、いじめの知覚については、構成人数差に主効果が見られ [ $F(1, 120)=7.88$   $P<.01$ ] たが、手段のちがいの主効果は、両知覚とも見出せなかった。

いじめ、いじめられている子の知覚においては、4つの要因のうち、性差と構成人数についてのみ、有意差が

得られたわけである。

〔順社会的行動(意図)〕

各条件別のいじめに対する順社会的行動意図の比率(%)を表Ⅲ. 1-6に示した。条件を越えて全体をながめてみると、3者の順社会的行動意図の間には、有意な差が見られた。 $(x^2=42.66$   $P<.001$   $df=2)$

表Ⅲ 1-6

各条件における援助の被験者%, 及び援助内で「直接自分一人で助ける」の被験者%

手 段	要 因			援 助	直接自分一人で助ける
	構成人数	傍観者	性		
身体的	5人	あり	男女	56.3	22.2
			男女	81.3	23.1
		なし	男女	75.0	50.0
	1人	あり	男女	87.5	64.3
			男女	93.8	6.7
		なし	男女	93.8	40.0
物質的	5人	あり	男女	81.3	30.8
			男女	93.8	66.7
		なし	男女	75.0	33.3
	1人	あり	男女	87.5	28.6
			男女	68.8	54.5
		なし	男女	93.8	66.7
1人	あり	男女	93.8	33.3	
		男女	100.0	62.5	
	なし	男女	75.0	25.0	
			93.8	73.3	

次に、各条件での援助率のちがいを見るために、「直接自分一人で助ける」に「別の方法で助ける」を加えて「援助」とし、「特別何もしない」を非援助とした。そして、援助率を角変換し、最初に身体的、物質的の各手段において、性差、構成人数の2要因について $2 \times 2$ の分散分析を行なった。(表Ⅲ. 1-7a, b) その結果、両方の手段とも構成人数のちがいに、主効果が見られた。 $(x^2=13.26$   $P<.001$   $df=1$ ,  $x^2=14.20$   $P<.001$   $df=1)$  構成人数が5人の時より、1人の時の方が援助率が高いということである。

次に、各手段において、構成人数差と傍観者の有無の2要因について、同様の分析を行なった。ここでは、身体的手段において、構成人数差に主効果が見られ ( $x^2=4.75$   $P<.05$   $df=1$ )、物質的手段においては、その傾向が見られた ( $x^2=3.12$   $P<.10$   $df=1$ ) がその他に有意な結果は得られなかった。(表Ⅲ. 1-8a, b) そこで、性差と傍観者の有無の要因を越えて、手段と構成人数の2要因について同様の分散分析を行なってみた。(表Ⅲ. 1-9) この分析結果からも、構成人数のちがいに

主効果が認められただけで、( $x^2=7.01$   $P<.01$   $df=1$ ) 手段の要因にそれは認められなかった。

以上のことから、本実験でのいじめの状況的要因において、援助するかしないかは、いじめる側の構成人数によってのみ影響をうけることが示唆される。つまり、援助は、手段や傍観者の有無にかかわらず、5人によるいじめより、1人によるいじめにおいて、なされやすいのである。

続いて、援助の枠の中で、積極的に自分一人で介入するか、あるいは、それよりは消極的に別の方法によるかの比率は各条件でどのようであるかについて分析してみた。援助する者の中で「直接自分一人で助ける」者の比率によって、ここでも角変換による2要因の分散分析を行なった。

まず、各手段において、構成人数差、性差について調べた結果、両手段において有意な性差が認められた ( $x^2=4.87$   $P<.05$   $df=1$ ,  $x^2=5.23$   $P<.05$   $df=1$ ) が、構成人数については見られなかった。また、交互作用もなかった。(表Ⅲ. 1-10a, b) 直接助けるのは、女子の方が多かったのである。

次に、各手段において、傍観者の有無と性差について分析を行なった。その結果、身体的手段において、傍観者 ( $x^2=10.90$   $P<.001$   $df=1$ )、性差 ( $x^2=6.04$   $P<.05$   $df=1$ ) とも主効果が認められたが、物質的手段においては、何も見出せなかった。(表Ⅲ. 1-11a, b)

男女において、手段、傍観者について同様に分析した。(表Ⅲ. 1-12a, b) ここでは、女子の傍観者の効果のみが有意であった。( $x^2=9.13$   $P<.01$   $df=1$ ) 傍観者効果が見られたわけである。

また、傍観者の有無の各条件においても同様に分析を行なった。(表Ⅲ. 1-13a, b) 傍観者のいる場合には、手段 ( $x^2=3.91$   $P<.05$   $df=1$ ) 性差 ( $x^2=4.43$   $P<.05$   $df=1$ ) とも主効果が見られたが、傍観者のいない場合には、性差のみが有意であった。( $x^2=8.09$   $P<.01$   $df=1$ )

援助についての尺度を得点化することによって、分散分析の処理を行なってみた。ここでの得点は、「直接自分一人で助ける」を4点、「別の方法で助ける」のうち、「先生に話す」を3点、「友だちに話す」を2点「特別何もしない」を1点として処理した。(実態調査の分析の結果、友だちよりも先生に話す方が援助の有効性において高いと有意に支持されたので、先生に話すの方を高い得点(3点)にした。

今までと同様に、各手段において、 $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を行なった結果、両手段において性差が有意であ

り、[ $F(1, 120)=9.83$   $P<.01$   $F(1, 120)=9.24$   $P<.01$ ]、身体的手段においてのみ、傍観者の有無の主効果を得ることができた。[ $F(1, 120)=6.83$   $P<.05$ ] その他は、主効果、交互作用とも見出すことはできなかった。

そこで、構成人数の条件を越えて、同様の分散分析を行なってみた。(表Ⅲ. 1-15) しかし、ここでも性差にのみ主効果を得ただけであった。[ $F(1, 120)=9.15$   $P<.01$ ]

表Ⅲ 1-7 a

援助率による構成人数差、性差についての分散分析表  
身体的手段(角変換法)

変 動 因	SS	df	$x^2$
構 成 人 数	340.218	1	13.26***
性 差	9.272	1	0.36
交 互 作 用	9.272	1	0.36
計	358.762	3	13.98**

$\sigma w^2=25.656$

表Ⅲ 1-7 b

物質的手段

変 動 因	SS	df	$x^2$
構 成 人 数	364.2372	1	14.20***
性 差	7.645	1	0.30
交 互 作 用	106.812	1	4.16*
計	478.695	3	18.66***

$\sigma w^2=25.656$

表Ⅲ 1-8 a

援助率による構成人数差、傍観者の有無についての分散分析表

身体的手段

変 動 因	SS	df	$x^2$
構 成 人 数	121.990	1	4.75*
傍 観 者	5.040	1	0.20
交 互 作 用	71.656	1	2.79
計	198.683	3	7.74

$\sigma w^2=25.656$

表Ⅲ 1-8 b

物質的手段

変 動 因	SS	df	$x^2$
構 成 人 数	79.745	1	3.12
傍 観 者	42.903	1	1.67
交 互 作 用	42.903	1	1.67
計	165.550	3	6.45

$\sigma w^2=25.656$

表Ⅲ 1-9

援助率による手段差，構成人数差についての分散分析表

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
手 段	2.723	1	0.21
構 成 人 数	89.870	1	7.01**
交 互 作 用	2.723	1	0.21
計	95.315	3	7.43

 $\sigma w^2=12.820$ 

表Ⅲ 1-10a

援助者内で直接助ける者の比による構成人数差，性差についての分散分析表  
身体的手段

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
構 成 人 数	12.567	1	0.40
性 差	152.399	1	4.87*
交 互 作 用	91.489	1	2.92
計	256.455	3	8.10*

 $\sigma w^2=31.276$ 

表Ⅲ 1-10b

物質的手段

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
構 成 人 数	2.189	1	0.07
性 差	158.153	1	5.23*
交 互 作 用	96.760	1	3.20
計	257.102	3	8'51*

 $\sigma w^2=30.2243$ 

表Ⅲ 1-11a

援助者内で直接助ける者の比による傍観者の有無，性差についての分散分析表

身体的手段

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
傍 観 者	337.089	1	10.90***
性 差	186.868	1	6.04*
交 互 作 用	0.029	1	<1
計	523.987	3	16.94***

 $\sigma w^2=30.9341$ 

表Ⅲ 1-11b 物質的手段

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
傍 観 者	13.764	1	0.46
性 差	65.286	1	2.16
交 互 作 用	99.800	1	3.30
計	178.851	3	5.92

 $\sigma w^2=30.209$ 

表Ⅲ 1-12a

援助者内で直接助ける者の比による手段差，傍観者の有無についての分散分析表 男子

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
手 段	49.851	1	1.48
傍 観 者	120.890	1	3.63
交 互 作 用	56.776	1	1.71
計	227.017	3	6.82

 $\sigma w^2=33.288$ 

表Ⅲ 1-12b

女子

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
手 段	39.753	1	1.43
傍 観 者	254.243	1	9.13**
交 互 作 用	5.040	1	0.18
計	299.036	3	10.74*

 $\sigma w^2=27.855$ 

表Ⅲ 1-13a

援助者内で直接助ける者の比による手段差，性差についての分散分析表 傍観者あり

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
手 段	117.614	1	3.91*
性 差	133.287	1	4.43*
交 互 作 用	13.801	1	0.46
計	264.702	3	8.80*

 $\sigma w^2=30.0732$ 

表Ⅲ 1-13b

傍観者なし

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
手 段	3.151	1	0.10
性 差	249.166	1	8.06**
交 互 作 用	5.221	1	0.19
計	257.538	3	8.36*

 $\sigma w^2=30.8172$



表Ⅲ 1-14a

援助得点による性差，傍観者の有無，構成人数差  
についての分散分析表 身体的手段

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	10.13	1	10.13	9.83**
B 傍 観 者	7.03	1	7.03	6.83*
C 構 成 人 数	1.13	1	1.13	1.10
AB 交互作用	0.78	1	0.78	<1
AC	0.13	1	0.13	<1
BC	2.53	1	2.53	2.46
ABC	0.04	1	0.04	<1
誤 差	124.12	120	1.03	
計	145.88	217		

表Ⅲ 1-14b 物質的手段

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	10.13	1	10.13	9.24**
B 傍 観 者	0.50	1	0.50	<1
C 構 成 人 数	1.53	1	1.53	1.39
AB 交互作用	1.13	1	1.13	1.03
AC	0.78	1	0.78	<1
BC	3.78	1	3.78	3.45
ABC	0.04	1	0.04	<1
誤 差	131.62	120	1.10	
計	149.50	127		

表Ⅲ 1-15

援助得点による性差，傍観者の有無，手段差につ  
いての分散分析表

変 動 因	SS	df	MS	F
A 性 差	20.25	1	20.25	9.15**
B 傍 観 者	5.64	1	5.64	2.55
C 構 成	1.56	1	1.56	<1
AB 交互作用	1.89	1	1.89	<1
AC	1.01	1	0.01	<1
BC	1.89	1	1.89	<1
ABC	0.004	1	0.004	<1
誤 差	265.69	120	2.21	
計	96.94	127		

## 2. 実態調査結果について

〔一般的ないじめ及び、いじめられている子に対する知覚〕

表Ⅲ. 2-1 から分かるように、男女とも得点の平均値は、ニュートラルポイントである3点より高い値であ

る。被害者はいじめをひどいものとして、いじめられている子をか弱い者として一般的に知覚しているようである。この値をもとに性差をみたところ、いじめについては有意ではないにしても性差のある傾向が見られた。(t=3.31 P<.01 df=158) 男子よりも女子の方が、より同情的にとらえているようである。

〔順社会的行動(意図)〕

自分一人でやめさせる、別の方法でやめさせる、特別何もしないの3つの方法における性差は有意であった。(x<sup>2</sup>=7.07 P<.05 df=2) また、何もしないとそれ以外、つまり、援助するかしないかにおける性差も有意であった。(x<sup>2</sup>=4.25 P<.05 df=1) 表Ⅲ. 2-2 から、援助しないのは男子の方が多い(30%)ののがわかる。援助内での2つの方法における性差は有意には至らなかったがその傾向は見られた。(x<sup>2</sup>=2.84 P<.01 df=1)

援助の中で、自分一人で直接的に助ける以外の方法として、「先生に話す」、「友だちに話す」の2つを提示し、どちらが援助の方法として有効かを判断させた。その結果、58.7%が前者を、41.3%が後者を支持し、「先生に話す」方法がより有効であることの結果を得た。(CR=2.24 P<.05)

〔コスト(援助出費、非援助出費)〕

コストについての5つの質問項目の得点を表Ⅲ. 2-3 に示した。いずれの値も得点が高いほどコストも大きくなるように得点化した。この値によって性差をみたところ、個人的責任性(t=2.80 P<.01 df=158)といやな気分(t=-3.17 P<.01 df=158)の非援助出費において有意差が得られたが、危険性(t=-0.92)、時間(t=1.55)、努力(t=-1.30)の援助出費においては有意な性差は見られなかった。個人的規範の逸脱に基くコストは女子の方が男子よりも高いということがいえるようである。

次に、5ポイントの各コスト尺度を高コスト群(5, 4)と低コスト群(3, 2, 1)とに2分して分析を行なった。2つのコスト群のちがいによる性差を測定してみたが、ここでも個人的責任性(x<sup>2</sup>=5.98 P<.05 df=1)といやな気分(x<sup>2</sup>=5.04 P<.05 df=1)の非援助出費においては、それは得られなかった。いじめへの援助出費に性差はないということである。

コストと援助との関係を調べるため、男女において、実態調査の質問項目1の3)で「援助」と回答した者、「非援助」と答えた者のコスト得点を用いて、2(男女)×2(援助、非援助)の分散分析を各コスト項目について行なった。

個人的責任性のコストでは、援助と非援助の間に有意

差が認められた。援助しようとする被験者の方が責任感が強いということが統計的に示されたわけである。(表Ⅲ. 2-5a) 性差は有意ではなかったが、女子の方が高いコストである傾向がここでも見られた。危険性および、努力のコストにおいては、どこにも有意な結果は見られなかった。(表Ⅲ. 2-5b, d) つまり、援助するかしないか、また、性差によって、援助的出費としての両者に相違がないということである。時間のコストにおいては、非援助者の方が時間的出費が大きという結果が得られた。(表Ⅲ. 2-5c) いやな気分のコストにおいては、性差、援助、非援助の両方に有意差が見られた。(表Ⅲ. 2-5e) 女子の方がコストが高く、援助者の方がコストが高いという結果が得られた。

続いて、同様の分析を性差と直接助けるか、別の方法によるかという援助差で行なった。その結果を表Ⅲ. 2-6a~e、図Ⅲ. 2-1 に示した。

個人的責任性のコストにおいては、性差に有意な主効果が見られた。 $[F(1, 119)=5.16 \quad P<.05]$  時間のコストにおいても同様に性差に主効果がみられた。 $[F(1, 119)=4.98 \quad P<.05]$  努力のコストにおいては、性差が見られたとともに、 $[F(1, 119)=6.00 \quad P<.05]$ 、交互作用も見られた。 $[F(1, 119)=7.06 \quad P<.01]$

#### 〔いじめにおける援助の経験〕

いじめられている子どもを援助した経験のある被験者は、男女とも有意に多かった。 $(CR=3.13 \quad P<.001, CR=4.02 \quad P<.001)$  しかし、性差は見られなかった。 $(\chi^2=0.48 \quad df=1)$

経験のある者において、性差と援助・非援助の2要因の分散分析を行なったが、主効果、交互作用とも有意ではなかった。(表Ⅲ. 2-8)

また、性差と援助差についても同様に行なった。ここでは、援助差において主効果が見られ $(\chi^2=7.96 \quad P<.01 \quad df=1)$ 、交互作用も有意であった。 $(\chi^2=11.68 \quad P<.001 \quad df=1)$

表Ⅲ 2-1

一般的ないじめ、及びいじめられている子に対する知覚の程度

n = 80	男		女	
	平均	S D	平均	S D
いじめ	4.15	0.87	4.26	0.81
いじめられている子	4.38	0.64	4.64	0.62

表Ⅲ 2-2

それぞれの援助方法における割合%, ( )内実数

援助方法	男	女	計
自分一人でやめさせる	16.3(13)	31.3(25)	23.8(38)
別の方法でやめさせる	53.7(43)	52.5(42)	53.1(85)
特別何もしない	30.0(24)	16.2(13)	23.1(37)

表Ⅲ 2-3

各コストにおける平均得点

コスト	男		女	
	平均	S D	平均	S D
個人的責任性	3.65	1.02	4.08	0.91
危険性	3.14	1.41	3.35	1.45
時間	2.98	1.40	2.63	1.44
努力	3.69	1.33	3.95	1.15
いやな気分	3.90	1.09	4.40	0.88

表Ⅲ 2-4

各コストにおける高コストの被験者 %

コスト	男	女
個人的責任性	62.5	80.0
危険性	51.3	51.3
時間	36.3	27.5
努力	65.0	73.8
いやな気分	68.8	85.0

表Ⅲ 2-5 a

コスト得点による性差、援助・非援助についての分散分析表個人的責任性のコスト

変動因	SS	df	MS	F
性差	2.539	1	2.539	2.96
援助	13.321	1	13.321	15.51**
交互作用	0.011	1	0.011	<1
誤差	133.983	156	133.983	

159

表Ⅲ 2-5 b

危険性のコスト

変動因	SS	df	MS	F
性差	1.222	1	1.222	<1
援助	0.809	1	0.809	<1
交互作用	0.054	1	0.054	<1
誤差	321.888	156	321.888	

159

表Ⅲ 2-5c  
時間のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	0.954	1	0.954	<1
援 助	12.948	1	12.948	6.63*
交互作用	0.381	1	0.381	<1
誤 差	304.641	156	1.953	
159				

表Ⅲ 2-5d  
努力のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	1.338	1	1.338	<1
援 助	0.149	1	0.149	<1
交互作用	0.054	1	0.054	<1
誤 差	242.574	156	242.574	
159				

表Ⅲ 2-5e  
いやな気分のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	4.661	1	4.661	5.99*
援 助	29.134	1	29.134	37.42**
交互作用	0.381	1	0.381	<1
誤 差	121.471	156	121.471	
159				

表Ⅲ 2-6a  
コスト得点による性差、援助差についての分散分析表個人的責任性のコスト

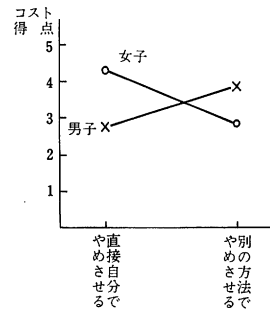
変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	4.100	1	4.100	5.16*
援 助 差	0.039	1	0.039	<1
交互作用	0.790	1	0.790	<1
誤 差	94.584	119	0.795	
122				

表Ⅲ 2-6b  
危険性のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	3.616	1	3.616	1.64
援 助 差	3.806	1	3.806	1.73
交互作用	0.928	1	0.928	<1
誤 差	261.555	119	2.198	
122				

表Ⅲ 2-6c  
時間のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	9.226	1	9.226	4.98*
援 助 差	3.250	1	3.250	1.75
交互作用	2.576	1	2.576	1.39
誤 差	220.570	119	1.854	
122				



図Ⅲ 2-1  
努力のコストにおける交互作用

表Ⅲ 2-6d  
努力のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	8.491	1	8.491	6.00*
援 助 差	5.161	1	5.161	3.65*
交互作用	9.991	1	9.991	7.06**
誤 差	168.329	119	1.415	
122				

表Ⅲ 2-6e  
いやな気分のコスト

変 動 因	SS	df	MS	F
性 差	2.195	1	2.195	3.78
援 助 差	0.039	1	0.039	<1
交互作用	0.002	1	0.002	<1
誤 差	69.188	119	0.581	
122				

表Ⅲ 2-7  
いじめにおける援助経験のある被験者 %

男	女	全 体
67.5	72.5	70.0

表Ⅲ 2-8

経験ありの被験者の比に基く、性差、援助、非援助についての分散分析表（角変換法）

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	41.538	1	1.34
援 助	80.371	1	2.59
交 互 作 用	6.126	1	0.20
計	128.035	3	4.12

$$\sigma w^2=31.069$$

表Ⅲ 2-9

経験ありの被験者の比に基く、性差、援助差についての分散分析表

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	90.080	1	2.68
援 助 差	267.869	1	7.96**
交 互 作 用	393.111	1	11.68***
計	751.060	3	22.31***

$$\sigma w^2=33.652$$

表Ⅱ 2-10 各自己概念項目の平均得点

自 己 概 念	男		女	
	平均	SD	平均	SD
強 勉	2.98	0.93	2.84	0.86
運 動	3.51	1.04	3.24	1.07
友 人 関 係	3.61	1.02	3.45	1.18

表Ⅱ 2-11a

自己概念の高い者の比による性差、援助・非援助についての分散分析表 勉強について

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	65.586	1	1.23
援 助	264.039	1	4.97*
交 互 作 用	16.436	1	0.31
計	346.0605	3	6.51

$$\sigma w^2=53.1369$$

表Ⅱ 2-11b 運動について

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	239.630	1	6.17
援 助	312.582	1	8.05**
交 互 作 用	420.660	1	10.84***
計	972.873	3	25.07***

$$\sigma w^2=38.812$$

表Ⅲ 2-11c

友人関係について

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	0.561	1	0.01
援 助	308.047	1	7.71**
交 互 作 用	345.083	1	8.64**
計	653.691	3	16.37**

$$\sigma w^2=39.933$$

表Ⅲ 2-12a

自己概念の高い者の比による性差、援助差についての分散分析表 勉強について

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	212.312	1	6.89**
援 助 差	301.077	1	9.77**
交 互 作 用	74.129	1	2.41
計	587.518	3	19.07***

$$\sigma w^2=30.803$$

表Ⅲ 2-12b

運動について

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	393.924	1	14.60***
援 助 差	375.865	1	13.93***
交 互 作 用	170.990	1	6.34*
計	940.780	3	34.87***

$$\sigma w^2=26.977$$

表Ⅲ 2-12c

友人関係について

変 動 因	SS	df	x <sup>2</sup>
性 差	346.375	1	15.42***
援 助 差	7.837	1	0.35
交 互 作 用	4.202	1	0.19
計	358.414	3	15.95**

$$\sigma w^2=22.4642$$

## 〔自己概念〕

自己概念と援助については以下の通りである。

勉強についての自己概念において、援助・非援助の間に有意差が見られた。 $(x^2=4.97, P<.05, df=1)$  勉強に自信のある者（かなり、とても自信があると答えた被験者）は、援助しようとする意図が高いことが示唆される。運動についての自己概念でも同様のことがいえる。 $(x^2=8.05, P<.01, df=1)$  ここでは交互作用も有意な値を示した。 $(x^2=10.84, P<.001, df=1)$  友人関係についても上記の自己概念と同じ結果を得た。

また、援助差についても分散分析を行なった結果、す

べての自己概念において有意な性差が見られた。 $(x^2=6.89, P<.01, x^2=14.60, P<.001, x^2=15.42, P<.001, df=1)$  3つの項目とも男子の方が高いことがわかった。勉強、運動については、援助差においても有意差が認められた。 $(x^2=9.77, P<.01, x^2=13.93, P<.001, df=1)$  両方とも、援助の方が自己概念の高い者が多かったのである。また、運動においては、交互作用も有意であった $(x^2=6.34, P<.05, df=1)$

最後に調査に用いた各項目間の相関表を下に記しておく。この表の値については、考察において述べたいと思う。

表Ⅲ 2-13a

各質問項目間の相関表 男 子

質問項目内容	いじめの知覚		援助	出 費					経験	自 己 概 念		
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	ひどい	かわいそう (同情)	援助法	個人的 責任性 (非援助)	危険性 (援助)	時 間 (援助)	努 力 (援助)	いやな 気分 (非援助)	経 験	勉 強	運 動	友人関係
1												
2	*** 0.618											
3	* 0.254	*** 0.372										
4	** 0.446	*** 0.436	0.225									
5	0.135	0.112	-0.140	0.236								
6	-0.090	-0.084	-0.125	-0.060	0.111							
7	0.077	0.018	-0.149	0.171	0.165	0.003						
8	** 0.335	** 0.288	*** 0.430	*** 0.454	0.116	-0.253	* 0.060					
9	0.129	0.061	** 0.298	0.182	-0.046	-0.089	-0.043	** 0.291				
10	0.114	0.077	0.178	0.258	0.119	0.107	-0.017	0.111	0.097			
11	0.038	-0.043	0.126	-0.054	0.090	0.084	-0.089	0.101	0.183	-0.013		
12	0.057	0.109	0.198	0.183	-0.120	0.055	-0.109	0.243	* 0.260	0.216	0.191	

表Ⅲ 2-13b

各質問項目間の相関表 女子

質問項目内容	いじめの知覚		援助	出 費				経験	自 己 概 念			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
	ひどい	わかい そう	援助法	個人的 責任性 (非援助)	危険性 (援助)	時 間 (援助)	努 力 (援助)	いやな 気分 (非援助)	経 験	勉 強	運 動	友人関係
1												
2	** 0.344											
3	*** 0.450	*** 0.372										
4	** 0.318		* 0.269									
5	-0.048	0.011	0.105	0.014								
6	0.023	0.090	-0.127	-0.188	0.163							
7	0.163	-0.008	0.075	0.088	0.195	0.162						
8	*** 0.367	0.145	0.217	*** 0.406	* -0.290	-0.201	-0.127					
9	0.078	0.017	* 0.244	*** 0.401	* 0.255	-0.051	0.093	* 0.223				
10	0.011	0.085	* 0.231	* 0.253	0.083	-0.116	0.207	-0.026	0.180			
11	-0.076	-0.040	0.107	0.007	0.040	0.025	0.030	0.053	0.276	0.039		
12	0.108	0.191	0.184	0.133	-0.063	-0.053	-0.021	0.116	0.216	0.054	** 0.305	

## IV 考 察

まず、実験結果について検討してみたい。

いじめ、あるいはいじめられている子に対する知覚においても、ひどいと感じる程度、同情の強さは女子の方が大きかった。しかし、男子のそれが、絶体的に低いというのではない。表Ⅲ・1-1 からわかるように、平均値はすべて4点（かなりひどい、かわいそう）を越えているのである。相対的にみた場合、女子の方が得点が高かったのである。つまり、女子の方がいじめの事態を憂慮すべきものとしてとらえ、また、同情的、共感的にとらえているのである。

この2つの項目の得点による分散分析では、いじめの手段のちがい、傍観者の有無の条件について、有意差は認められなかった。

被験者は手段のちがいによる2つのいじめを、いじめの程度として同じレベルであると知覚したと判断できよう。ただ、いじめというのは、手段のちがいはあっても結局は精神的な苦痛である。身体的乱暴をうけ、肉体的苦痛を負っても、それは精神的な苦痛に至るものとしていじめをとらえるなら、明確にこれらを2分することは困難なことであるのかもしれない。被験者がこのよう

に、精神的な苦痛として両手段（とくに身体的手段）を換算したのであれば、両者にちがいが見られないのうなずけることである。

傍観者の有無については、いじめを知覚することによりあまり影響しないと解釈できる。Latané (1980) は、援助における傍観者の効果による責任分散を社会的衝撃の分散として一般化し、他者の存在により、情動、認知などに心理的な変化が起こり得ると述べたのであるが、本実験の場合、いじている子もいじめられている子も他者はすべて既知のクラス内の人間であったことから、社会的衝撃の分散が起こらなかったのではないだろうか。

構成人数については、1人によるいじめの方がひどいいじめであるとの結果を得た。が、これは予期しないことであった。被験者は小学校5年生であり、この時期の子供は、小集団を形成して行動をとりやすい。そういう子供にとって、1人の存在で行動する他者は、異質な存在としてうつるのかもしれない。または、ボスの存在として知覚したのかもしれない。このことについて述べるためには、本実験の結果だけでは不十分であり、くわしい研究が待たれる。

このことを援助との関係の中でみると、援助する場合には、5人によるいじめより、1人によるいじめの方が援助率が高い。これだけからは、多勢に無勢は分が

悪いということになる。しかし、先の問題（いじめの知覚についての）をふまえて判断すると、いじめの程度としては1人による場合の方がひどく、ひどいと知覚した時の方が、援助行動は為されやすいということになる。実態調査の結果においても（表Ⅲ．2-13, 14）、いじめの知覚と援助の間には、男女とも正の有意な相関がある。さらに、いじめの知覚は、個人的責任性（責任感）及び、いやな気分という非援助出費とも正の相関がある。上述のような判断は妥当なのだろうか。この問題については、実態調査結果のところで詳しく述べたいと思う。

援助項目においては、傍観者のない場合の方が、直接助ける者が多いという結果を得た。つまり、傍観者により援助することの責任性の分散がおこっていることが示唆されたわけである。ただ、援助率による分析では、それらは見られなかった。Latané, B (1969) は、傍観者による責任分散についての実験で、いっしょにいる他者が友人などではなく、未知の人である場合の方がその効果がより起こりやすいと報告した。本実験では、前述したように、その他者は友人である。各自が責任を自覚し、何らかの方法で援助しようと試みたのではないだろうか。まわりの友人に相談したり、先生に告げることによって援助しようとしたため、援助率における分析では責任性の分散がみられなかったのであろう。ただ、これらの方法による援助は、1人によるものではない。よって、責任分散は1人による直接的な援助のときはじめて起こり得るものであると解釈することも可能である。

以上のことから、いじめの種子をみんなで見ていても介入しないのは何故かという問いに対しては、手段、構成人数にほとんど関係なく、責任性が分散するからであると答えることができよう。逆にいえば、自分一人で知覚している時に直接介入しやすいのである。

続いて、調査結果から、援助行動とその周辺について考察を加えることにする。

まず、援助と出費との関係であるが、援助は個人的責任性、いやな気分という非援助出費とのみ正の有意な相関があった。また、これらの非援助出費といじめの知覚（ひどい、かわいそう）の間にも同種の相関があった。さらに、2つの非援助出費の間には正の相関が有意に見られたのであるが、これらと3つの援助出費との間には、相関がないか、あるいは負の相感になっている。以上のことをまとめると、援助をする被験者は、いじめをひどい（かわいそう）と知覚すると、非援助出費を指示する個人的規範が活性化され、援助にいたるのである。このように考えると、実験において問題となっていたこ

とも説明できよう。なお、この際の援助出費は援助と有意ではないが負の相関関係にあることから、援助行動の有志決定過程における評価の段階で、非援助出費より低い評価がなされたのであろう。援助出費が高いと援助行動に至りにくいということもできよう。

つまり、いじめにおいて援助することの出費の評価は非援助出費の評価が重要であり、反対に、援助しないことにおいては、むしろ援助出費を中心に評価された結果であるといえる。これは Schwartz, S. H. (1977) のモデルとほぼ一致するものである。

いじめへの援助の経験は、全体の70%が「ある」と答えている。これをいじめの発生率として考えると、援助しなかった（ただ見ていた）ものを含めれば、もっと高くなるであろう。しかし、被験者がいじめをどうとらえているかはわからない。あるいは、ただのいたずら、いやがらせ程度のももの含まれているかもしれないからである。

これを援助との関係で見ると、経験がある方がやはり援助しやすい。とくに、直接助ける方法に出やすいことがわかった。また、経験と非援助出費には正の相関が見られる。経験したことによって、個人的規範がより一層活性化され、そして、援助化することが示唆される。とくに、男子では、小さい値ではあるが、経験と援助出費は負の相関にあることから、経験したことで、努力、困難性などは少し弱められているのではないかということも推測できる。女子では、危険性と有意に正の相関がある。援助（介入）すると、報復されるといういじめの様子がうかがえよう。しかし、それよりも、個人的規範の活性化の方が大きいため援助に至るのであろう。

さて、高木 (1984) は、順社会的行動の類型化（因子分析法による）の研究で、6つの行動型に分けて説明した。それによると、他者から乱暴されている人を助ける行動は、緊急事態における救助行動であり、社会的規範にいくらか指示されているが、個人的規範の指示はほとんどなく、援助出費を中程度に含んだ行動として類型化されている。しかし、これまでの結果はこの説明と一致しない。本研究では、援助出費より非援助出費を指示する個人的規範が大きく関係しているからである。高木の分類にあてはめるなら、むしろ、社会的弱者に対する援助行動としてとらえなければならぬ。これは、社会的、個人的規範に強く指示され、援助出費はほとんど含まないとされており、こちらの方が妥当であろう。

このように、考えるなら、いじめの援助の経験率が70%、言いかえるならいじめの発生件数が決して低くないことから、いじめは緊急事態ではないのかもしれない

い。また、このようにとらえるなら、いじめられる子は特定の限られた子供であるのかもしれない。

以上、実験、調査の結果を総括的にまとめると、本研究からいじめへの援助は個人的規範の活性化によって、多くが規定され、状況的な要因としては、いじめの手段や、いじめる側の人数よりも傍観者としての他者の存在により、個人的規範の活性化に影響を与えるということが言える。

## V 今後の課題

本研究で取り扱ったのは、あくまで順社会的行動意図であったため、結果の強さを心配していたのであるが、コスト、経験から Schwartz, S.H. のモデルとはほぼ一致する援助の過程をとらえることができた。また、主体的要因として、自己概念（勉強、運動、友人関係としての社会性）の高低から援助との関係を調べた結果、援助する者は自己概念が高いということが示唆され、Wilson, J. P. ら (1984) の知見に近い結果が得られた。しかし、これは調査の結果から得られたものであり、実験的に操作したものからは、傍観者効果による責任分散 (Latané B. の知見の再検証) をみたにとどまっている。

Staub, E は、順社会的行動と主体的要因との関係を理解するために、状況的な変数からのアプローチの必要性を強調している。本研究でのいじめにおける状況的な変数は、いじめの状況的な変数のほんの一部にすぎない。それはもっと多岐にわたるものであり、一面的にとらえることは困難なものである。というのも、いじめにおける援助というのは、Wilson, J. P. らの実験状況と異なり、攻撃に対しての援助だからである。いじめの問題をさらにくわしく論ずるためには、本研究での変数の他に、援助を行なうモデルの効果（とくにリーダーの行動）、いじめる子、いじめられる子の性格的な変数などを考える必要があるだろう。そして、これらを援助者の主体的要因との関わりの中で考察すれば、いじめにおける援助の核心に触れることができるのかもしれない。また、困難なことではあるが、実験が行動意図としてではない順社会的行動について行なわれるのであれば、より多くの知見が得られるにちがいない。

## 引用・参考文献

1. 朝日新聞 1985年6月30日紙面。
2. 森田洋司 1984年12月27日朝日新聞紙面。
3. 遠藤豊吉 弱いものいじめ 日本放送出版協会、1984。
4. 金賛汀・中京テレビ報道部 「いじめ」問題の出入口 情報センター出版局 1984。
5. Latané, B., & Darley, J. M. The unresponsive bystander: Why doesn't he help? Appleton-Century-Crofts, 1970.  
竹村研一・杉崎和子訳 冷淡な傍観者—思いやりの社会心理学 プレオン出版 1977。
6. Rutkowski, G. K., Grudes, C. H. & Romer, D. Group cohesiveness, social norms, and bystander intervention. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1984, 44, 545-552.
7. Bar-Tal, D. Prosocial behavior: Theory and research. *Hemisphere*, 1976.
8. 中村陽吉 対人関係の心理—攻撃が援助力—大日本図書 1976。
9. 中村陽吉 対人場面の心理 東京大学出版会 1983。
10. 松木敦・高木修・箱井英寿 順社会的行動の類型化 (1. クラスター分析法を用いて) 日本グループ・ダイナミクス学会第32回大会発表論文集, 71-72。
11. Schwartz, S. H. Normative influence on altruism. In L. Berkowitz (Ed.). *Advances in experimental social psychology*. Vol. 10. Academic Press, 1977. 222-279.
12. Schwartz, S., & Howard, J. A. A normative decision-making model of Altruism. In Ruston, J. P., & Sorrentino, R. M. (Eds), *Altruism and helping behavior: Social, personality, and developmental perspectives*. Lawrence Erlbaum Associates, 1981. 189-211.
13. 高木修 順社会的行動の意志決定過程の検討 (Schwartz のモデルについて) 日本グループ・ダイナミクス学会第32回大会発表論文集, 75-76。
14. Wilson, J. P., & Petruska, R. Motivation, model attributes, and prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1984, 46, 458-468.
15. Staub, E. *Positive social behavior and morality*. Vol. 1. Academic Press. 1978.

本稿は、筆者の指導によって行われた昭和60年度本学部専攻科学生長岡浩君の実験資料等におうている。





1) あなたは、学校の勉強に自信がありますか。

と ても	か なり	も ない	あ まり	ま った く
自信が ある				自信が ない

2) あなたは、運動をすることに自信がありますか。

自信が ある				自信が ない
-----------	--	--	--	-----------

3) あなたは、同じクラスの人となら、だれとでも仲よくできますか。

仲よく できる				仲よく できない
------------	--	--	--	-------------

4) あなたには、どんなことでも相談のできる仲のよい友だちがいますか。

い る		い ない
--------	--	---------

3. 次の文章をあなたのクラスに起こったできごとだと思って読んで下さい。そして、下の質問に答えて下さい。

今は、雨の日の昼休みの時間です。みんな、教室で楽しそうに遊んでいます。でも、教室のうしろの方で、5人の子がAという子をほうきでつついたり、かみの毛をひっぱったり、けったりしておもしろがっています。Aという子は、何も悪いことをしていませんが、おとなしいし、クラスの中でもあまり目立たない子なので、何をされてもだまっままうつむいています。みんなもこの様子に気付いています。

1) この様子を見てどう思いますか。

と ても	か なり	も ない	あ まり	ま った く
ひどい と思う				ひどいとは 思わない

2) Aという子をどう思いますか。

かわいそう だと思う				かわいそうだ とは思わない
---------------	--	--	--	------------------

3) あなたは、どうしますか。

で自直 助分接 げ一 る人	で別 助の け方 る法	し特 な別 い何 も

\* 1 「別の方法で助ける」と答えた人は、その方法を右の2つのうちから選んで下さい。

話先 す生 に	に友 話だ すち

\* 2 「特別何もしない」と答えた人は、なぜですか。次のうちから、あなたの気持ちに最もあてはまるものを1つだけ選んで下さい。

だ とめ 思 うも か む らだ	だ か い と た じ 思 な め な い は か ら と し	思 わ れ な い 何 か も	た は く な い か ら り	他 の 人 の 事 に	こ し わ か い え か ら し が	な 助 い け る 自 信 が

☆

「直接、自分一人で助ける」と答えた人は、\*1, \*2を答える必要はありません。

4. 次の文章をあなたのクラスに起こったできごとだと思って読んで下さい。そして、下の質問に答えて下さい。

今は、雨の日の昼休みです。みんな、教室で楽しそうに遊んでいます。でも、5人の子がBという子の大切にしている下じきをわったり、ノートやランドセルにチョークで落書きをしておもしろがっています。Bという子は、何も悪いことをしていませんが、おとなしいし、クラスの中でもあまり目立たないので、何をされてもだまっままうつむいています。みんなもこの様子に気付いています。

1) この様子を見てどう思いますか。

と ても	か なり	も ない	あ まり	ま った く
ひどい と思う				ひどいとは 思わない

2) Bという子をどう思いますか。

かわいそう だと思う				かわいそうだ とは思わない
---------------	--	--	--	------------------

3) あなたはどうしますか。

で自直 助分接 げ一 る人	で別 助の け方 る法	し特 な別 い何 も

\* 1 「別の方法で助ける」と答えた人は、その方法を右のうちから選んで下さい。

話先 す生 に	に友 話だ すち

\* 2 「特別何もしないと答えた人は、なぜですか。次のうちから、あなたの気持ちに最もあてはまるものを1つだけ選んで下さい。

だ とめ 思 うも か む らだ	だ か い と た じ 思 な め な い は か ら と し	思 わ れ な い 何 か も	た は く な い か ら り	他 の 人 の 事 に	こ し わ か い え か ら し が	な 助 い け る 自 信 が

☆

「直接、自分一人で助ける」と答えた人は、\*1, \*2を答える必要はありません。